# タケ類ハチクの一斉開花現象を調べて分かってきたこと

小林慧人（京大院）・梅村光俊（森林総研・北海道）・崎谷久義（太市の郷）

## はじめに

ハチク (*Phyllostachys nigra var. henonis*) は、イネ科タケ亜科に属する温帯性のタケである。主に日本・中国・韓国に生育し、日本では、食用筍や農作業用の竹材として古くから各地に植栽されている。この種類は、長期にわたり栄養繁殖を行い、一斉開花・枯死する一回繁殖型の生活史であることが知られている。古文書などの過去の開花記録により、開花周期（開花年の間隔）は 60 年または 120 年と推定され、直近では 1908 年前後に開花したと報告されている（ただし 10～20 年の幅はある）。そして、次の開花のピークは 2020 年代と予想され、その前触れといえる現象が、数年前から各地で報告されるようになってきた。ハチクは、開花後に枯死すると考えられているが、実際にどのように開花し、枯れた後にどのように更新するのかはよく分かっていない。

## 調査方法と結果

2017 年 5 月に開花が見られた兵庫県姫路市相野のハチク林（太市の郷の活動地）を調査地とした。2017 年 6 月から 2018 年 9 月にかけて、開花本数の把握、栄養投資量の定量、種子生産量の評価、開花枯死後の更新過程を調べた。

その結果、対象としたハチク林（約 350㎡）では 1 年では咲ききらず、２年間で林内の竹稈の約９割が開花し枯死していた。また、開花に際し、リンや窒素などの栄養の多くを花へ投資していたが（地上部投資量に対して６～７割程度）、これまでに実生や種子は見つかっていない。開花・枯死後には、林床には長さ 1m に満たない小型の稈が出現したことから、結局、地下茎による栄養繁殖を続け、更新することが示唆された。

## 今後の課題

今後、日本各地でハチクが開花することが予想される。各地で開花情報を収集し、開花地においては継続的な調査研究が行われ、知見が蓄積されることが望まれる。兵庫県内において、筆者らは 2017 年から 2018 年にかけて、姫路市内や加西市内でハチクの開花を複数確認している。

ハチクの開花直後の花序
開花時には雄蕊が垂れており、まさにイネ科の花らしい。

開花枯死したハチク林の林床には、
長さ１mに満たない小型の稈が出現。
これにも花序が付いていた。